

**第４回　那賀川左岸堤防地震・津波対策事業環境回復モニタリング委員会
議事概要**

１．日　　時：平成２８年２月３日（水）１０：００～１２：００

２．場　　所：阿南市ひまわり会館　ふれあいホール

３．出席委員：

湯城 豊勝 委員長（阿南工業高等専門学校名誉教授）

乾 隆帝 委員（山口大学大学院理工学研究科助教（特命））

大田 直友 委員（阿南工業高等専門学校創造技術工学科准教授）

河口 洋一 委員（徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部准教授）

木下 覺 委員（徳島県植物研究会会長）

佐藤 陽一 委員（徳島県立博物館自然課長）

森本 康滋 委員（徳島県自然保護協会会長）

（武藤 裕則 委員（徳島大学大学院 ソシオテクノサイエンス研究部教授）欠席）

４．配付資料：

資料-１ 議事次第、配席表、委員会規約

資料-２ 那賀川左岸堤防地震・津波対策事業環境回復モニタリング委員会 資料

５．議 事：

（１）地震・津波対策事業について

（２）環境モニタリング調査について

（３）環境保全対策の結果について

（４）今後のスケジュール

6. 議事要旨：

(1) 地震・津波対策事業について

特に意見なし。

(2) 環境モニタリング調査について

①大きな出水が2年連続し、工事の影響や保全対策の効果と出水による影響を切り離して評価するのは難しいが、全体的にみて保全対策はうまく進んでいる。

②ハゼ類とカニ類の回復は早い。シオマネキの個体数は回復しているが、個体サイズが工事前の状況まで回復するにはあと2年くらいかかる。貝類は早くても3年くらい回復までに時間がかかると考えられる。

③指標種に注目した評価の方法は良いが、その他カワアイガイなど工事前に確認されていて工事後にみられない種についても注目してモニタリングを行うとよい。

④代償地2の創出により、高いところが出水の際の生物の避難地となり、底生動物の減少を抑える効果があったのではないかと考えられる。

(3) 環境保全対策の結果について

①代償地1はシルトの投入と地盤高の改善によりシオマネキの幼生の加入や下流部での底生魚類の増加などの改善効果がみられた。今後は出水等によりシルトが減少することもあるため、その際に再投入できるように、近傍の工事等で浚渫土が発生した場合には保管しておくことも必要である。

②代償地2の堤防前面の土のうの設置は、出水時に水制効果があったのではないかと。しかしながら、出水時に流れが変わり、砂嘴側の底質の変化の原因にもなる懸念もあるため、水理学的な面からも気を付けながらモニタリングしていくと良い。ヨシはまだ十分な回復がみられないが、来年度の生育状況をみながら、追加移植等の改善も検討していくとよい。

(4) 今後のスケジュール

①来年度のモニタリングは今年度と同様の内容で実施することにより。平成29年度以降の計画については、平成28年度までの調査結果等から次回の委員会において、河川水辺の国勢調査への移行や継続が必要な調査項目について審議を行うものとする。

②基盤情報であるレーザースキャナーによる地形計測や粒度組成の調査は、今後も継続して実施するとよい。

(5) 総括

①本事業は干潟の保全対策として良い事例であるため、今後全国に向けて情報発信していくとよい。

以上の議事を踏まえ、今年度のモニタリング調査結果及び環境保全対策の結果、来年度のモニタリング調査計画は了承された。

以 上